

育成馬の放牧管理技術

農業研究センター 草地畜産研究所

担当者：志垣 啓

研究のねらい

本県の900m以上の高標高地帯には約1万haの改良草地と広大な野草地があるが、主に、肉用牛の放牧が行われ、農用馬の放牧育成は一般的に行われていない。馬の飼養は粗飼料の給与が基本であるため、育成馬にとって可能な限り放牧を主体とした育成を行い、放牧地で十分な運動をさせることにより骨格及び足腰の発達を促すことが重要である。このため、豊富な草資源を生かした農用馬の放牧育成を行い、その発育性について検討した。

研究の成果

- 1 日当たり増体量(以下DG)は、放牧馴地～試験開始で 0.63 ± 0.16 kg/日、13～18ヵ月齢では 1.26 ± 0.14 kg/日と成績は良好である。
- 2 18～24ヵ月齢では 0.43 ± 0.10 kg/日、24～30ヵ月齢では、 0.43 ± 0.10 kg/日と増体が鈍くなった。
- 3 ブルトン種系(以下ブル)供試馬の体高をブル雌の平均発育値と比較すると、12ヵ月齢では145.6cmで2.1cm低いが、30ヵ月齢では161.9cmで平均発育値に劣らない結果となった。
- 4 半血種の供試馬の体高をペルシュロン種(以ペル)雌の平均発育値と比較すると、12ヵ月齢では148.2cmで1.0cm低く、30ヵ月齢では163.8cmで平均発育値より1.8cm低い結果となった。
- 5 以上の結果により、半血種の供試馬はペル雌の平均値より発育率において0.5%発育が劣っていたものの飼養管理上問題はなく、草資源を生かした農用馬の放牧育成は有効である。

普及上の留意点

- 1 放牧馴致を十分行う必要がある。
- 2 草地の効率的な利用面から、輪換放牧を行うこと。
- 3 退牧後速やかに追肥を行ない、草地管理に細心の注意を払う。
- 4 草量が不足する冬場には補助飼料(稲ワラ、牧乾草)を給与する。

表 1 増体量の推移

(kg、kg/日)

馬体 No.	導入時	期間 DG	12 ヶ月	期間 DG	18 ヶ月	期間 DG	24 ヶ月	期間 DG	30 ヶ月	通算 DG
1	516	0.57	594	1.28	793	0.55	879	0.08	892	0.54
2	450	0.91	576	1.21	763	0.30	809	0.60	902	0.65
3	377	0.61	461	1.05	623	0.39	684	0.21	716	0.48
4	333	0.51	403	1.40	620	0.39	680	0.47	753	0.60
5	325	0.58	405	1.34	613	0.51	692	0.17	718	0.56
平均	400.2	0.63	487.8	1.26	682.4	0.43	748.8	0.31	796.2	0.57
標準偏差	81.5	0.16	92.0	0.14	88.00	0.10	90.50	0.22	93.30	0.06

ブルトン種系：馬体 No. 1、3、4

半血種：2、5

表 2 体高の推移

(cm)

品種	12 ヶ月	18 ヶ月	24 ヶ月	30 ヶ月	発育率 (%)
ブルトン種系平均	145.6	153.2	155.9	161.9	111.2
ブル雌	147.7	155.8	159.2	161.1	109.1
半血種平均	148.2	154.3	159.9	163.8	110.5
ペル雌	149.2	158.0	162.9	165.6	111.0

注 1 ブル雌及びペル雌は家畜改良センター十勝牧場の平均発育値

2 発育率は 30 ヶ月齢体高 / 12 ヶ月齢体高 × 100



写真 1 放牧育成馬